

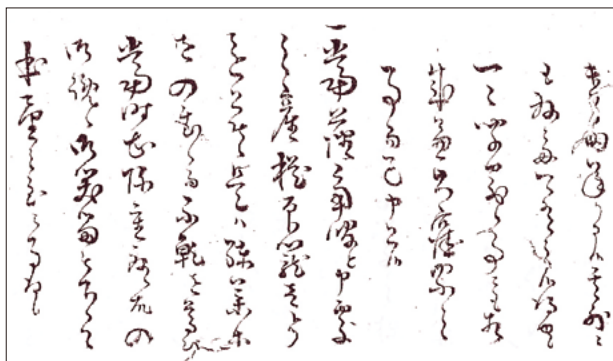


記憶の交流

～移封後の佐竹家中と常陸～

慶長7年（1602）、長く常陸国を拠点に活動してきた佐竹氏は、突然出羽国への移封を命じられます。以後佐竹氏は出羽国秋田藩20万石を領する大名として江戸時代を過ごし、付き従った家中たちも常陸の地を離れることになりました。もっとも、佐竹氏やその家中と常陸との関係が完全に途絶えてしまったわけではなく、江戸時代以降もいくつかの交流がおこなわれていました。

江戸時代に入り、秋田藩では家譜編さん事業が実施されます。その過程で由緒調査のために秋田藩士が常陸国に派遣されたことはよく知られていますが、こうした藩の事業に触発された家中たちも、かつて住み暮らした常陸国に思いを馳せていきます。秋田に残された記録を見ていくと、常陸国に由緒を持つ佐竹家中たちが個別に常陸国を訪れていたことが分かります。彼等は秋田藩に伝わる記録から自家の由緒地を調べ、その情報をもとに常陸国との接点を探し出します。やがて江戸時代後期になると、こうした取り組みは常陸国との直接的な接触・交流へと発展し、同じ苗字を持つ家との系図照合などをとおして一族として新たな関係を結ぶこととなります。



▲秋田藩小室家からの書翰(部分)(小室彬家文書 274) 角館(秋田県仙北市)で作られる樺細工が送られている



人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館 特任准教授
天野 真志
近世史部会 協力員

常陸大宮市域でも佐竹家中との交流は確認されます。『美和村史』でも紹介される下檜沢村の小室家は、佐竹氏の秋田移封にともない当主である小室相模が秋田へ随従し、弟の治左衛門が同地に土着しました。それから約200年の後、小室家のもとに秋田に住む小室家から手紙が届きます。やがて両家は系図などの情報を交換するなかで由緒が一致したようで、時を超えて双方の記憶が結び結ばれることとなります。

江戸時代、常陸国は水戸藩領となりますが、秋田に移った佐竹家中にとってはかつて住み暮らした地として記憶され、分断された由緒を取り戻す活動が続けられました。こうした想いに常陸国の人びとはどのように接していたのでしょうか。佐竹という記憶を介して交錯する秋田と常陸の関わりについて、さらに見つめていきたいと思いますので、情報や記録をお持ちの方は、ぜひお教えてください。

■問い合わせ■

文化スポーツ課

文化・スポーツグループ ☎52-1111(内線344)

占領期の常陸大宮に生きた人びとの姿

占領期の人びとの姿を知るうえで、「プランゲ文庫」という重要な資料群が存在します。「プランゲ文庫」は米国メリーランド大学図書館にあり、昭和20年(1945)から昭和24年(1949)までの日本で刊行された出版物を網羅したコレクションです。現在では、コレクションの整理が進み、マイクロフィルム化された資料を国立国会図書館憲政資料室でも閲覧することが可能です。

「プランゲ文庫」が日本でも閲覧できるようになったことで、2000年代以降、占領期日本の社会や文化をめぐる研究は大きく進展することになりました。そして、この膨大な「プランゲ文庫」のなかには、かつて常陸大宮市域で発行された資料もいくつか含まれています(【表】を参照)。それらは大きく2種類に分類することが可能で、(A)俳句や短歌に関するサークル雑誌などと、(B)地域の動向を報道している新聞などになります。

たとえば、常陸大宮市域における敗戦直後の俳句運動では、人びとによる俳句の作成をとおした「俳



一橋大学大学院社会学研究科特任講師(ジュニアフェロー)

高田 雅士
近現代史部会協力員

壇の民主化」や「農山村民主化」の実現が謳われ、都市と農村の格差解消、あるいは女性の地位向上なども目指されました(たとえば、中崎久子「女性と俳句」『麦笛』1巻2号、1946年11月など)。

占領期を生きた常陸大宮の人びとが、当時何を考え、そしてどういった社会を目指していたのか、そうした日々苦闘していた姿を「プランゲ文庫」に所蔵された資料からは垣間見ることができます。

【表】プランゲ文庫に所収された常陸大宮市域を発行地とする雑誌・新聞

分類	雑誌・新聞の名称	発行者	発行地	発行時期・号数
A	麦笛・俳句雑誌	麦笛社	塩田村	1巻1号(1946年9月)―1巻2号(1946年11月)、3巻1号(1948年1月)―3巻3号(1948年4月)
	書研	諸富野村青年書道研究同志会	諸富野村	2輯(1946年10月)
	清花	清花誌社	諸富野村	3輯(1946年10月)―4輯(1947年2月)
	鷹	鷹俳句会	大賀村	1946年9月号
B	アカルイムラ・組合ニュース	大賀農民組合	大賀村	1号(1946.8.27)―6号(1947.1.20)
	珂北評論	珂北評論社	大宮町	5号(1948.10.20)―10号(1949.7.20)
	関東新報 The Kanto	関東新報社	大宮町	1号(1947.1.20)―3号(1947.9.20)
	民友新報	民友新報社	大宮町	2号(1946.12.5)―21号(1949.6.15)

註) 佐々木啓氏作成のものに筆者が加筆をおこなった。

■問い合わせ■

文化スポーツ課

文化・スポーツグループ ☎52-1111(内線344)



古い日記 —「日常」を考える素材姿

「10年ひとむかし」という言葉があります。私たちが生きている「いま」も10年もすればもう昔のことに感じてしまう。それくらい、世の中は激しく移り変わっていくことの例えです。

①昭和13年(1938)12月5日 「麦ふみをする。大宮駅へ出征兵見送りに行く。」

②昭和23年(1948)11月28日 「炭焼をする。… 糶ほしを終る。五俵を俵にする。炭焼き3.0 h
モミノ調製2.5 h」

③昭和33年(1958)11月25日 「金南瓜を上げる。煙草本葉の調理をする」。

現在、明治44年(1911)生まれの人が残した日記を整理しています。上の①～③は、そこから一年のうちのほぼ同じ時季の記録を抜粋し、10年間隔で並べてみたものです。どれも短い文章ながら、当時の生活の破片を見つけることができ、暮らしの変遷を辿る手がかりになります。

例えば、③の葉煙草の記録は、常陸大宮市域の農家生活を語るに欠かせないものです。①には、農作業とともに、戦時下を象徴する出来事が記されています。自分の意思とは関係なく「日常」が違う形になっていく、私たちの今と重ねながら読める記述です。終戦間もない時期の記録である②には、仕事の内容だけでなく労働時間が記されています。その日の仕事量を時間で測る(表す)ことは、一体いつ頃に日常的な感覚になったのでしょうか。関心は尽きません。さらには、南瓜が③の60年後に「お化けカボチャコンテスト」で光を浴びることになるのを同時代の人には想像していなかったかもしれません。



林 圭史氏

茨城県立歴史館 史料学芸部学芸課 主任学芸員

今回紹介した日記は、個人の備忘録・内省的な記録で、他人に見せることを意識した現代人のSNSとは性格が異なります。しかし、SNSも50年後には歴史資料として扱われているかもしれません。葉煙草の栽培で忙しく過ごしたあの頃、あるいは東日本大震災、そしてコロナ禍の経験。体感や記憶の中の時間の長さや濃さは、同じ国や市町村に暮らしていながらも、家庭や個人によって違うでしょうし、情報技術の進化は、生活環境の様変わりをさらに早めているようにも感じます。そんな「いま」を生きている皆さんが感じる「ひとむかし」は何年くらい前ですか？

■問い合わせ■

文化スポーツ課

文化・スポーツグループ ☎52-1111(内線344)



市指定史跡 八田雷神山横穴墓群

車で国道118号線を太子町方面へ常陸大宮市の中心街を抜け、それから国道293号線に左折して少し行くと、左手に「雷神山横穴群」という看板が見えてきます。私は古墳時代のお墓を研究の対象としているので、那須方面に出かけるたびにこの看板が気になります。

「横穴群」とは、古墳時代から平安時代の横穴墓（「横穴」と表記される場合もある）が密集している遺跡の名称です。横穴墓とは、丘陵斜面に洞窟のような横穴を掘り、そこに亡くなった人を埋葬するお墓です。茨城県内では100遺跡、約1400基の横穴墓が確認されています。横穴墓が造られた地域は、県央から県北地域に多く、県南・県西地域にはほとんどなく、分布に偏りがみられます。また、県北地域の分布を詳細に見てみると、太平洋沿岸と久慈川流域に多くが存在しております。常陸大宮市には「雷神山横穴墓群」と「岩穴横穴墓群」の2つの遺跡があり、合計10基の横穴墓が確認されています。これらの横穴墓群は、県北地域ではもっとも海から離れた西の端に位置している横穴墓群となります。

看板に誘導されて道を進むと、玉川を望む駐車場に到着します。そこから凝灰岩の丘陵斜面を少し登った中腹あたりに、横穴墓が造られて



▲雷神山横穴墓群



稲田 健一氏

考古部会協力員

ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社

文化財調査事務所

います。現在確認できる横穴墓は5基ですが、これ以外にも埋没している可能性があります。

5基の横穴墓は1基が上位に、4基がその下に横一列に並んでいます。上位の1基は墓室が最も大きく、平面形は不整形な円形になっています。円形の墓室は県内の横穴墓の墓室としては非常に珍しい形状です。その他の横穴墓は平面形が長方形で、県内ではよく見られる構造です。

はじめに、道端に立つ遺跡の看板が気になると書きましたが、県内の100もある横穴墓の中で、整備され常時見学できる横穴墓は10遺跡もありません。その中でも、横穴墓の遺跡で国道などに案内看板があるものは、この遺跡とひたちなか市の十五郎穴横穴墓群だけではないでしょうか。それ故、横穴墓好きの私としては、もっと注目されてもよい横穴墓群だと思っています。

■問い合わせ■

文化スポーツ課

文化・スポーツグループ ☎52-1111(内線344)



幕末のはしか禍を生きる

文久2年(1862)8月、上伊勢畑村(上伊勢畑)の百姓又次郎(36歳)の妻もと(30歳)は、はしかを患い、若くして亡くなりました。娘のはつ(14歳)とさき(9歳)、そして4月に生まれたばかりの善吉を残して一。又次郎は、シングルファーザーとして3人の子供たちを育てることになったのです(「御用留」、上伊勢畑区有文書)。

はしかは麻疹とも呼ばれるウィルス性の感染症です。感染すると39℃以上の高熱や発疹の症状があらわれ、肺炎や中耳炎を併発することもあります。現在は1歳時と小学校入学前に2度ワクチンを接種して大半の感染を防ぐことができますが、江戸時代には「疱瘡は見目定め、麻疹は命定め」とも言われた危険な病気でした。

文久2年の夏、全国ではしかが大流行しました。さらに、ひと月後にはコレラも並行して流行したことで被害が拡大しました。とりわけ江戸の被害は甚大で、3ヶ月の間に約2万人が亡くなったとも言われています(『藤岡屋日記』)。また、感染予防や回復に良いとされた薬・食品の価格が暴騰したり、神に頼んで災難を逃れようとした人びとが町中にあふれたりして、江戸は「麻疹騒動」と呼ばれる混乱状態に陥ってしまいました。

はしかとコレラの波は、水戸藩領にも押し寄せました。水戸馬口旁町(水戸市末広町)の油問屋小泉茂兵衛は、水戸城下の死者数を500人余りと見積もっています(「年中日記覚」、小泉家文書)。江戸と同じように物価が高騰し、神輿をかついだ群衆が騒ぎ立てながら市中を練り歩きました。一方、常陸大宮市域では、主に那珂川流域の村々で感染が拡大したようです。小泉は、長倉



添田 仁氏
近世史部会部会長
茨城大学
人文社会科学部准教授

村(長倉)の惨状について「此節はしか尚亦コロリ盛にて五日之間に三十人之亡命有之、おそろ敷事」と記しています。村人の5%にあたる30人の命が、わずか5日間で失われたこととなります。また、対岸の上伊勢畑村でも2ヶ月で8人が死亡しました。この年の上伊勢畑村は渇水による不作も重なり、「複合災害」の様相を呈していたことがうかがえます。

水戸藩の対策は、予防策が中心でした。市内の各所に、藩が配布したパンフレット「郡官施板はしか養生の心得」が残されています。これは、はしか予防に良い食品や生活習慣を示したもので、村役人が複写し、旅人にまで配られました。このほか、徳川斉昭の正室吉子(貞芳院)が、領民一人一人に予防薬を一粒ずつ配ったことも知られています。

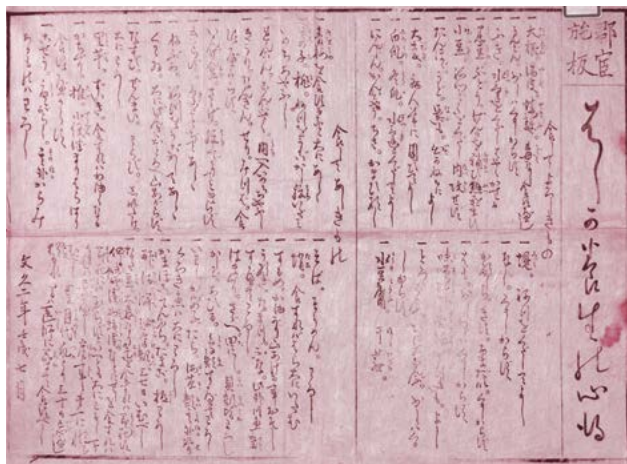
さて、シングルファーザーとなった又次郎の運命や如何に一。乳飲み子だった善吉の育児は、となり村の飯野村(茂木町飯野)が月1分1朱の「養育金」で引き受けてくれました。さらに、上伊勢畑村の村人たちが、子供たちの「養育」に必要な御救金の下付を藩に願ひ出てくれています。感染症で被災した家族に寄り添い、救いの手を差し伸べ、生きる支えになっていたのは、身近な地域社会だったと言えるのではないのでしょうか。

幕末のはしか禍について詳しく知りたい方は、『常陸大宮市史研究』4号所載の拙稿「水戸藩の流行り病一文久2年(1862)の麻疹とコレラを中心に一」をご参照ください。

■問い合わせ■

文化スポーツ課

文化・スポーツグループ ☎52-1111(内線344)



▲郡官施板 はしか養生の心得 (小野瀬家文書)